

平成29年度第1回宇都宮市学校教育推進懇談会会議録

■ **日時** 平成29年6月27日(火) 13:30~15:15

■ **会場** 宇都宮市庁舎教育委員室

■ **出席者**

委員： 藤井佐知子 会長，福田 治久 副会長，竹島 由里子 委員，松村 典男 委員，
船田 元 委員（代理：上野栄一 様），大川 直邦 委員 浪花 寛 委員，
高橋 利和 委員

事務局： 教育長，教育次長，学校教育担当次長
教育企画課長補佐，教育企画課総務担当主幹，学校管理課長，学校教育課長，
学校健康課長，生涯学習課長，文化課長，スポーツ振興課長，教育センター所長，
学校教育課課長補佐他

■ **委員からの主な意見・質問等（要旨）**

○第2次宇都宮市学校教育推進計画の策定について

現行計画の概要及び評価について

大川委員：学習内容定着度の調査について，数学，英語と比べた場合，国語のみ達成状況が低い，この件についてどのような理解をしているのか。

事務局：国語が，前期計画を改定する前の22年度まではよく伸びていた。当時，それまでの伸び率を参考に目標値を設定していたため，目標値が3%になっている。国語は，全国学力・学習状況調査で見ると，中3の成績は向上しており，力は低いものと考えている。今後，第2次計画の策定にあたり，指標をどのように設定していくか考えていく予定である。ただし，C評価ではあるので，児童生徒の読書活動など，様々なことに取り組んでいきたい。

大川委員：逆の見方をすれば，目標の達成はできていないが，成果は出ているのであろう。

松村委員：国数英ともに22年度より正答率50%未満は減っており，大いに評価しているが，パーセントでの比較なので，テストの難易度も関係しているのではないか。

事務局：毎年，正答率が同じになるよう問題を作成している。

藤井会長：柱ごとの総括的な評価はされているのか。

事務局：資料5の中ほどに，重点施策事業の取組状況が書いてあるが，この内容がそれにあたるものと考えている。

藤井会長：その結果どうだったか，総括的なものが載っていないので，質問した。取組状況と成果がワンセットで書かれているとよい。

事務局：活動指標という形では設定しておらず，そのような形での評価は記載していないが，一定の成果は出ていると考えている。

上野委員：施策4にあるように，小中学校の連携は進んでいながらも，不登校が減っていない理由は具体的にあるのか。

事務局：小中学校の連携は進んでいるが，中学校から新たに不登校になる生徒は少なくない。小学校からも連携をさらに強めていかななくてはならない。小学校の情報をつないでいく必要がある。

藤井会長：小中一貫による変化はあるのか。

事務局：27年度については、前年度より減少しており、わずかな効果はある。

上野委員：小学校の保護者から、発達障害のことは中学校には伝えないよという依頼があり、入学後に伝えたというような状況がある。

○学校教育の現状と課題について

松村委員：教員の年齢構成を見ると、小学校の教員の方が、年齢が高い者が多い。また、全国学力・学習状況調査の結果で、小学校の算数が下がってきているが、何らかの関係があるように思える。説明にもあったが、若手教員の育成には、全力で取り組んでいかないと、ベテラン教員の技術が引き継がれない。また、若手教員の全体のレベルアップをはかるには、マイスター教員など、力のある先生を東京などから学校に呼んで、学校園全部で授業を見て学ぶとよい。個人だけでなく、地域学校園や市全体で、良いものから学べるとよい。

藤井会長：教員の年齢構成と児童生徒の成績には相関があるのか。

事務局：確かに全体の年齢構成は小学校の方が高いが、割合的には、小中学校とも50代が多くなっており、中学校の結果は伸びていることを考えると、教員の年齢構成と算数の正答率をそのまま結びつけるのは難しいと思うが、今後検討していく。

藤井会長：小学校のみが悪くなっていることについて、分かっていることはあるか。

事務局：現在分析しているが、昨年度末から、学力向上を大きな課題として取り組み始めているところである。3割未満の児童が増えていることについて分析しており、習熟度別学習など、差がある児童生徒にも対応できる取組をしてきたところであるが、今後どのようにしていけばそれが機能していくのかを考えている。

藤井会長：学校全体で、先生方が学び合うような場はあるのか。

事務局：授業力向上プロジェクトを行っており、各学校が教員の授業力向上を図ることができるよう、交付金も交付している。実際のところ、大学の先生を呼んで研修を行っているなどの取組をしており、このような取組が広がっていくと良いと考えている。

事務局：校内研修サポート事業という形で、希望する学校に大学から先生を招いて、1年間を通して学校全体を指導していただけるような取組を行っている。また、教員マイスター制度として、若手の教員がベテラン教員の知恵から学ぶことができるようなシステムを設けて進めているところである。

藤井委員：このような取組をしている成果が広く知られたり、結果となって現れたりすると良いと思う。

浪花委員：本市では教育委員会と学校が連携を深めて、子どもと向き合う時間の確保に取り組んでおり、一定の成果を挙げているところである。国の動向としては教員の資質向上と業務適正化がセットとなっていることや、教員の長時間労働や働き方改革が問題になっていることもあり、計画の中に位置付けてどのように見せていくのかを考える必要があるのではないかと。

藤井会長：新しい計画の中でそのようなことが入れることができると良いと思う。

高橋委員：現状と課題について、数字を使って様々な内容を示してはいるが、実感が入ってい

ないように思う。例えば、教職員、保護者からするとどうかというところの実感が伴っていない。また、施策事業の評価が見えない。学校現場の実感、家庭での実感も含め、この後見えるようになってくるのか伺いたい。

藤井会長：この後新しい計画の案が出てくると思うが、もう少し最初の段階で、生の声を載せることができるような流れがあると良いのではないかな。

事務局：昨年度、すべての保護者対象にとったアンケートもあるので、検討していきたい。

藤井会長：できれば、数字ではない部分で、施策ごとにここまで出来た、出来ていないという分析があると次につながるのではないかな。

高橋委員：資料7にある課題の①、④、⑤、⑥において、小中一貫教育・地域学校園を今後も進めていくことが強調されている。今回の資料では、第2次計画の理念や基本目標の中で小中一貫教育・地域学校園をどのように扱っていくのかが上手く流れていない印象を受ける。

藤井会長：次回に向けて検討いただきたい。

事務局：現在の計画の施策の柱7本について評価する指標とは別に、施策ごとの成果を図る基準は元々設定していないので、終わってみての主観的な評価になるかもしれないが、検討させていただきたい。

○「第2次宇都宮市学校教育推進計画」の基本理念等について

松村委員：基本目標¹に「学習意欲」という文言があるが、新学習指導要領においては「学びに向かう力、人間性」に変わっているので、変更すべきではないか。また学習活動を推進するのは教員なので、「学習活動の推進」ではなく、「授業改善の推進」としたほうが良いと思う。

事務局：今回の資料においては、既に市民権を得ている文言を使わせていただいた。

竹島委員：保護者、子どもには施策は分からない。どれくらい周知されているのか。

藤井会長：この計画は市の行政計画であるという認識でよいのか。また、学校レベルでどのように取り組んでいるのかという点についてはどうか。

事務局：この計画自体は市としてやるべき計画である。この計画を、学校教育として、先生方が子どもたちをどのように指導していくかということについては、現行計画では学校教育スタンダードにして、各学校に徹底を図っている。その中で、子どもと保護者に内容を全部周知することは難しい。スタンダードダイアリーなどで目標など、伝えられるものは伝えている。

浪花委員：各学校が、年度初めに立てる学校運営、学習指導、健康体力、児童指導の4つの計画の中に、学校教育スタンダードと関連していることを位置づけており、HPでも公表されている。

竹島委員：この計画や課題は、すべての小中学校に浸透しているものではないのか。

浪花委員：市が共通の重点としているものについては、各学校でも必ず重点にしている。

藤井会長：スタンダードについては、今後どのようにしていくのか。

事務局：単に継続ということではないが、スタンダードについても検討する。今までは、こ

の計画の次の年に作るという流れでやってきた。

藤井会長：スタンダードダイアリーは、家庭と学校をつなぐツールだと思うので、一工夫あるとよい。

事務局：スタンダードダイアリーは、中核市レベルですべての児童生徒に配布しているという例はほとんどないと思う。そのような中、毎年改良を加え、良いものになってきていると考えている。

松村委員：スタンダードダイアリーは、大変良いものである。心の教育の面でのメタ認知で使うように広めるとよい。

藤井会長：基本目標については、どのように考えるか。

高橋委員：施策が出てこないとわからないが、基本目標¹が、かなりのボリュームになるように感じる。

藤井委員：¹と²のバランスが悪くならないようにするとよい。

高橋委員：基本理念に使われている「志」という言葉だが、あえて志を選んだ理由を説明してほしい。

事務局：これからの30年後の社会を想像すると、決して生易しい社会にはならないと想像する。そうした中では、一人一人が、社会に対してどのようにしたらよいのか考えながら育てていってほしいという思いを込めて、夢よりもシャープなイメージの志という言葉を使った。

高橋委員：心の持ち様に重きを置いており、義務教育段階ではややハイレベルな感じがする。

藤井会長：県の振興計画にもこの言葉が使われているが、合わせているのか。

事務局：偶然である。教育再生実行会議の第10次提言の中にもこの言葉が使われている。将来を見据えて目標をしっかりもち、強いたくましが心の中にないと生き抜いていけないということや、自分がこのようにしていくという夢や目標をもつことが大切だという思いも込めて、志を使わせていただいた。

上野委員：14歳で初めて「立志」ということもある。

上野委員：宇都宮市の状況として、外国人住民が増えているという話があったが、基本目標²ある「グローバル化に主体的に向き合う教育と郷土愛の醸成の推進」に、市としてどのように取り組んでいくのか。

事務局：グローバル化の中に自国の文化理解や郷土愛も含まれるという考え方もあるが、特に、宇都宮市をよく理解して、好きであり、未来を担ってくれる子どもたちを育てたいという思いがあって、特出しして、郷土愛の醸成を入れた。

上野委員：宇都宮市の良さをプレゼンテーションしてほしいという依頼に対して、困惑した生徒の姿を見たこともあり、郷土愛を表現することは難しいと感じているが、せっかくの機会なので、自分の住んでいる場所をたくさんPRできる子供たちを育成してほしい。

事務局：この施策の中には、宇都宮に限らず、外国から見た日本や栃木というものも入れていきたいと考えている。

浪花委員：基本目標①と②で取り組もうとしていることに非常に重なりがあり、どのように整理するのに難しさを感じる。また、今回、小学校にプログラミング教育が入ってきたところで、予測不能という言葉がキーワードになっているように思うが、基本目標②の中で、将来のことを限定して考えるのが良いのか、予測不能な事態にも対応できる力を育むということであるのが良いのか、難しいと思う。また、基本理念等については、前回の計画にあった「共に」が消えている。新学習指導要領においては、共に学ぶことができることが学力の要素の一つであるという考え方も示されている中、「共に」という言葉を大切にすべきではないか。

松村委員：主体的、対話的で深い学びという文言が今回の授業改善のキーワードであり、この文言を入れて示した方が、取り組むべきポイントが明確になるのではないかと。

事務局：知徳体を培っていくなかで、どういう変化にも対応できる子どもを育てたいという思いがあり、そのことは基本目標①に託しているが、区別が難しい内容であり、悩んでいる。「共に」あるいは「協働」は入れたい言葉で、工夫しているところであるが、現在検討している。また、基本目標①に「主体的、対話的で深い学び」を入れた場合、成長し続ける基盤を培うのは授業だけではないと考えているため、内容が狭くなってしまっているように感じている。現在の案では、「～を通して」という方法の部分については、基本目標の中には入れないようにしている。

藤井会長：基本理念が個人ベースで書かれており、これからの世の中の変化を考えて、学校しか人間関係を作る場がないというようなことになった場合、宇都宮の子どもは一緒に学び、助け合えるような感じを出せた方が良いのではないかと。

福田副会長：理念の中に、「家庭・地域・企業などと協力を連携・協働した活力ある学校」という表現があるが、企業はどのようにかかわっていくイメージなのか。

事務局：一人の子どもが、教室の中で安心して一緒に学ぶことができることが必要ということや、様々なことを身に付けるにあたって、いろいろな体験を通して身に付けていかないと、大人になったときに基盤として入っていかないとというような思いがある。また、そのことは、学校の力だけで実現できることではなく、家庭や地域、企業と力を合わせて子どもを育てていくことで、そのような教育ができるという思いがあり、こうした地域などの力の結集を、理念の「活力」という言葉の中に込めているところである。